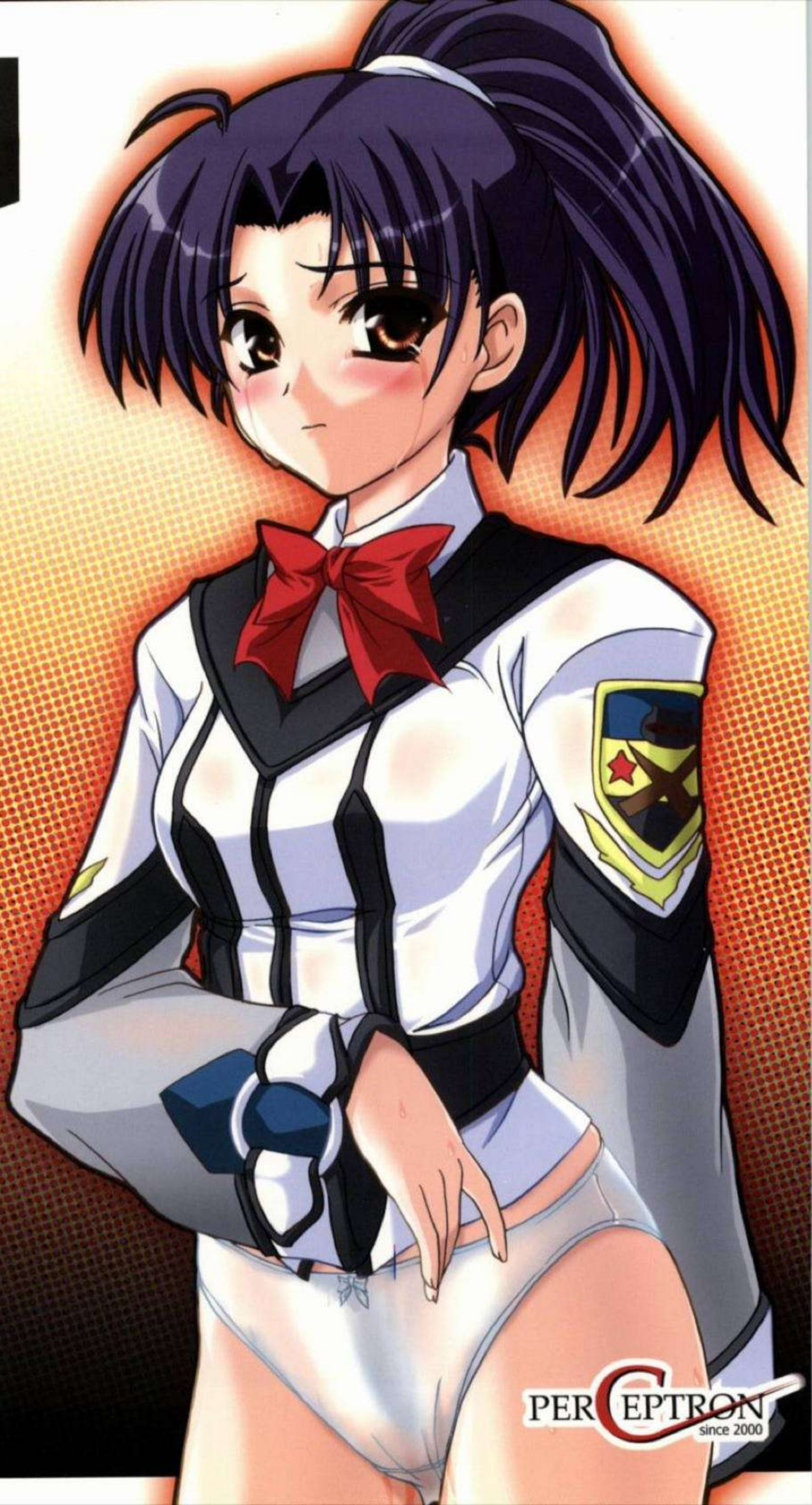


# Amelia



PERCEPTION  
since 2000



# Asuete



PERCEPTION  
since 2000



中表紙……P3

目次……P4

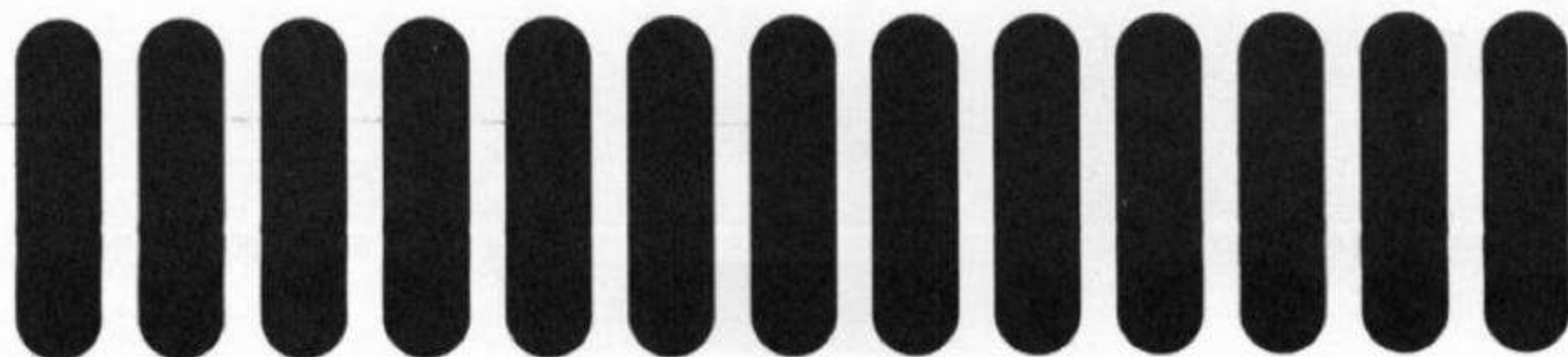
Emergency (浅贺葵)……P5

例えばこんな非日常 (三毛猫)……P25

FreeTalk……P29

奥付……P30

Perceptron presents







我と我が一族に  
敵対したこと

必ず  
後悔すること  
なるぞ



不憫だな  
今回の依頼はその一族  
からだぜ

なっ!?



何を  
笑う!?

ガッ

んん!



…  
っ  
っ



逃げ!





依頼は迅速に行うのが  
鉄則だがな…  
あんたは上玉過ぎる

…あ

キラッ

くく…せいせい  
楽しませて  
もらうぜ











おもらしかよ  
何をビビってんだ!?

本当に  
引き裂くとしても  
思ったかよ

そんな勿体無い事  
しねーよっ

ギリ

ギリ

なつ  
そ...それは!?

ローターだよ  
ちよつとばかし  
強力だけどな

ガッ

プル

ビ

ビ  
ビ  
リ  
ッ  
ッ  
ッ  
ッ



いゃあっ

びん

あぁ

きんち

きんち

おあぁあ

びん

ほらあと少しで  
啜えちまうぞ

…んぐら

…んあつ  
あぁああつ

あぁ

あぁ





くく…凄いいじゃん  
奥まで入っちゃったよ

あぁ…

あ…



…殺して  
やるっ

こ…この  
痴れ者がっ



これから少なくとも  
その殺意が萎える位  
狂ってもらうからね

千々  
MAX



はは  
無理無理





ウハッ

グあああ

駄目ッ……  
と……とめてえっ

イヤあ

ビッパッ



っあ

すぐに 正気じゃ  
いられなくなる

一秒間に100回近く  
振動する特別製だ  
凄いだろっ?

す……  
凄ひっ……

グググ



あああ

グググ  
グググ  
グググ



ウハッ

はっ……ひい

ん……っ  
んああ

ああッ!!!

ビッパッ  
ビッパッ  
ビッパッ

ビッパッ  
ビッパッ  
ビッパッ

ビッパッ

ビッパッ  
ビッパッ  
ビッパッ





そんな折角だ  
思う存分  
イかせてもらえ

どうした？胸を  
揉んでるだけだぜ？  
またイきそうなのか？



…あつ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

や…ん

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

んぽ

んはあ

あ

やああ  
…っ



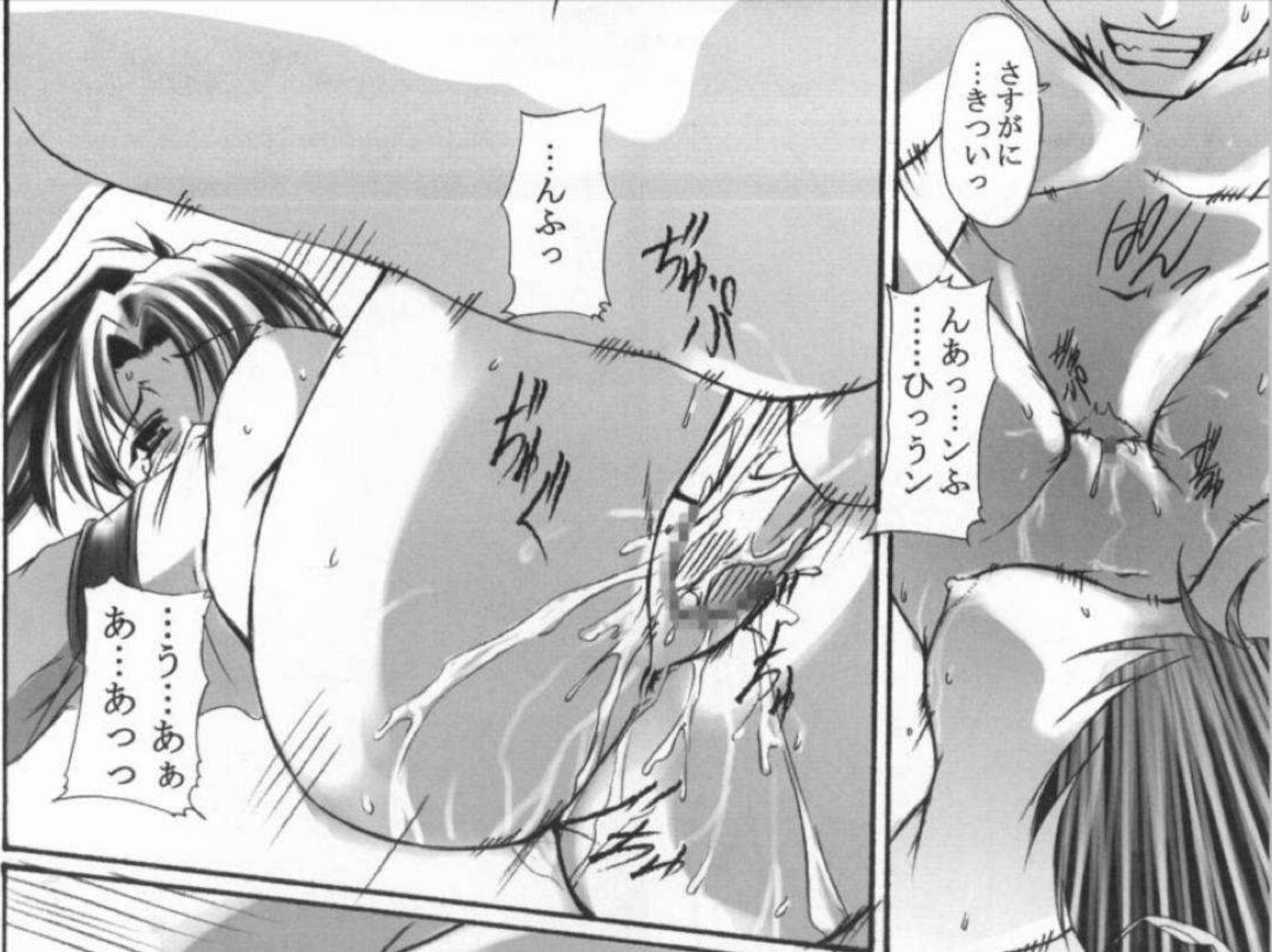
や…んふっ  
て手を離せ

あああ

いっ…  
やああああ

あああ  
ああつ





…んあっ

さすがに  
…きついつ

んあっ…んあ  
…ひっうん

…う…あ  
あ…あっ

んあっ!

あ…あ…んっ  
あ~~~~~







壁に手をついて  
尻を向ける

どう…か？

そうだ

随分と素直に  
なってきたじゃないか

しゅん

くく  
犯されたのが  
そんなに効いたか？

どひん

キョ

否！ 頭の切れる  
貴様のことだ

従順なフリをして  
逃げる機会を探っ  
てるんだろう？

そ…そんな事は  
ない









ケツの穴……  
しっかり  
閉めておけよ



うー  
あま

くく……  
早速効いてきたか  
いい音してるぞ



うっ!

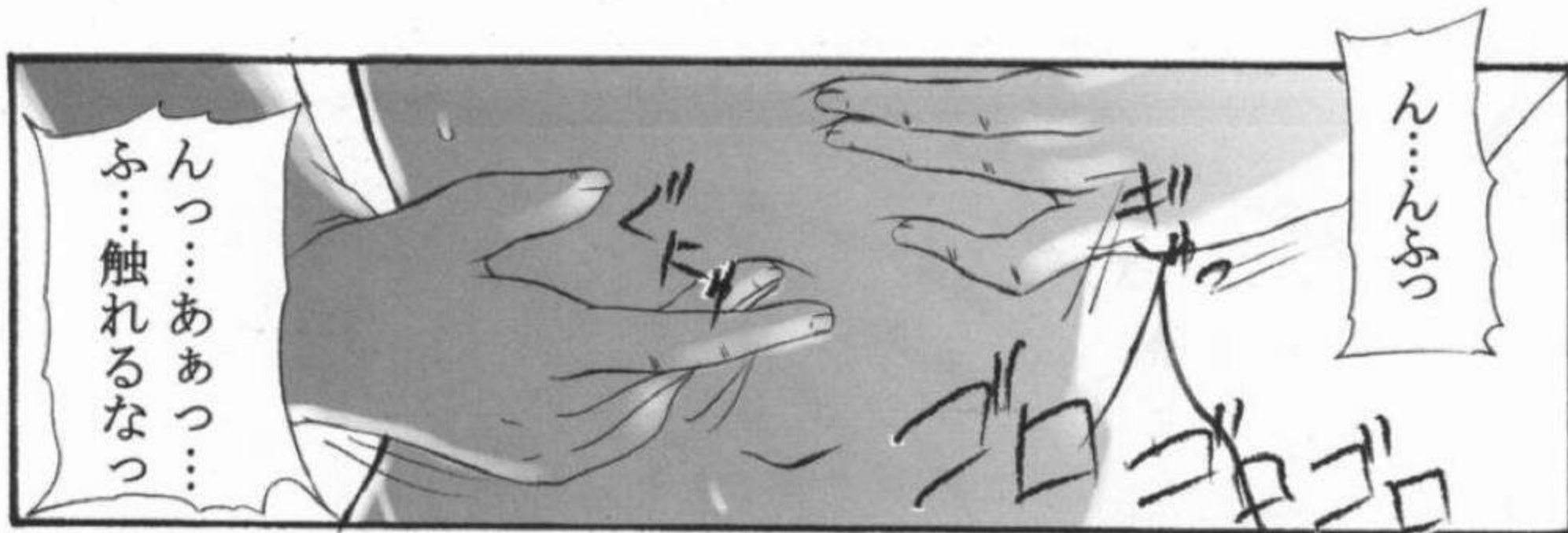
あま  
あま  
あま



んんっ……かぶっ  
あああっ……ううあっ

……あま





んっ…ああっ…  
ふ…触れるなっ

ん…ん…ん



あうっ



くくこいつはいい  
あそこもよく  
締まってるぜ

うはっ  
…んっ



ほらもつと尻に  
力入れる!

はひい

おねが…  
も… う  
漏れ…る





はんっ  
んぶっ

んんっ



はんっ



つつ... たつぶり  
注いでやるぞ

はんっ

はんっ

んぶっ  
んぶっ





...んうっ







…んはあつ  
あああ

あはあつ  
…あふつ



…全ては青の為に

ああ

も、とお  
かけてかけてえ

お前の死により  
彼の者は  
竜になるだろう



例えばこんな非日常

三毛猫

「いいか、今日はここまでだが、死にたくなければしっかりと訓練をしろよ」

そう言っつて本田先生は教室を出て行った。

僕は机に座つて考える。

誰と一緒に作業しようかな…、

やっぱり舞かなあ、あのポニーテールは殺人的な魅力を醸し出しているし、なにより僕はポニーテールが好きだ。

最近はとんと町で見かけなくなつたよなあ…、

残念なことだよ、本当に。

「お〜い速水〜」

滝川がブンブン手を振りながら寄つてくる。

「何か用？」

「一緒に訓練しないか？」

「やだっ」

「がーん」

速攻で断る。

なんで訓練まで男と一緒にやらねばならぬのか、そんな汗臭い

青春などまっぴらごめんである。

それよりは、原さんや森さんと汗まみれになりながら整備をした方がよっぽどましである。

というか、明らかにそちらの方が良いな。

「速見く、どっかにトリップしてないで頼むよお」

情けない声で滝川が泣き付いてくる。

「なんで、そんなに必死なの？」

滝川のあまりの様子に一応聞いてみる。

「実はな、俺見ちまつたんだよ」

声のトーンを落として滝川が語りだした。

「それは昨日のことだったんだ。俺が二番機パイロットの仕事を終えて帰ろうとしたら、でたんだよ」

「な、なにが？」

僕は喉をゴクリと鳴らしながら続きを促した。

「げ、幻獣。あれは小さいけど確かに幻獣だった」

その言葉に嘘は微塵も感じられなかった。

しかし幻獣だって？それが本当だとしたら一大事だ。

「本田先生にはもう言ったの？」

「いや、とりあえず見間違いだったら嫌だし、

もう一度よく調べてからのの方が良いかなと思って」

「なるほど、でも一人で確かめる勇氣はないから、僕に手伝っ



欲しいという訳だ。」

「な、何か言い方に刺があるんだけど、その通りです。」

「わかった。僕でよかったら協力するよ」

「あ、ありがとう速水」

その夜僕と滝川は、滝川が幻獣を見たという場所まで歩いていった。

「それで、その小さな幻獣はどこで見たの？」

「プレハブ校舎の階段を走って登っていったんだ。そしてその途端に消えちゃったんだ」

「うーんなるほど、それじゃあ小隊長室から監視をしようか」

僕達は小隊長室から外の窓から様子をうかがった。

一時間後……異常なし。

二時間後……異常なし。

「滝川、本当に見たんだろ？」

小聲で話し掛ける。

「本当だってば、信じてくれよ」

「だって、何も起こらないじゃないか」

などとそんなやり取りをしていると、急に目の前が明るくなった。

「んっ、なんだっ」

滝川が驚いて声を上げる。

「整備員詰所からだっ」

その明るい光は、しばらく光続けた後、ゆっくりと薄くなっていき、やがて消えた。

そしてまた辺りは静けさを取り戻した。

「な、なんだったんだ？」

滝川が恐る恐る聞いてくる。

膝がカクカクと笑っている、余程驚いたのだろう、まあ、僕も心臓がバクバクいつているが。

「と、とりあえず行ってみよう」

「そ、そうだな……」

僕達はゆっくりと慎重に、整備員詰所に近づいていく。

辺りは静寂に包まれていて、息をする音でさえ大きく感じられた。

僕達は整備員詰所の壁に取り付くと、顔を見合わせて頷いた後に、ゆっくりと窓から中の様子を覗き込んだ。

「あ、あれは……」

「い、石津……」

そこには魔法使いの格好をした石津 萌がいた。

ご丁寧に床には魔方陣らしきものが書かれている。

しかもその周りを何だか得体の知れない生物が走り回っている。



僕は滝川の方を見る。

滝川は何も言わずにコクリと頷いた。

どうやら昨日滝川が見た幻獣というのは、コレに間違いがない様だった。

それにしても…。

僕はもう一度石津の方を向く。

どうしても突っ込みたいことが僕にはあった。

それは、夜中に魔法陣書いて何か呼び出すなんて、お前はどこの無口な先輩かあ。と言う事だった。

次の瞬間、すごい勢いで石津がこちらを向いた。

まるで、僕の思ったことを感じとったかのようだった。

僕達と石津の目が合う。

しばらくの沈黙の後、石津が口を開いた。

「み…見た…わね…」

その目は、怪しく光っていた…様に見えた。

いやっ、光っていた。

「ど、どわわあゝ」

滝川が耐え切れなくなって逃げ出した。

僕も逃げ出そうとした途端に肩を掴まれる。

「ど…こへ…行く…の」

僕の肩に手を置きながら石津が言った。

普段は鈍いくせに何でこんな時だけ動きが早いんだ。

「丁度…人で…が…足り…なかった…の…」

て…手伝って…」

そんな突拍子もない事を言い出した。

こ、断りたい。でも断ったら断ったで何か身の危険を感じる…

じくつと感情のこもっているのかわからない目で見つめられる

。「わ、わかりました。て、手伝わせて頂きます」

こ、断れなかった…。

「そう…あ…ありがと…」

僕の肩から手を離し歩いてく石津。

その背中がついて来いと言っている様だった。

僕はそれに渋々付いて行くことしか出来なかった。

「い、一体僕はどうなるんですか？」

魔方陣の中心に座らされて、僕は嫌な予感が全開だった。

「だ…だいじょう…ぶよ…。痛い…のは…さ…最初…だけ…だから…」

「ど、どういう意味ですかあゝ？」

こ、これはあれか、世間一般で言うところの、生贄ってやつですか？

石津はそんな不安げな僕の言葉など、まるで聞こえていない様



に、なにやら呪文を唱え始めた。

それに呼応するかのように辺りに風が渦を巻き始め、幻獣の様な小さな生き物がギャツギャツと魔方阵の周りを走り回る。

なんかもう、この世の情景ではなかった。

「いつ、一体何がやりたいんだあ〜」

「の…呪い…よ…。」

「はいっ？」

「あ…明日は…プ…プール…でしょ…。だ…だから…の…呪う…の。水着…嫌…だから…雨を…降らすの…」

淡々と小さな声で、しかし力強い口調でそう言った。

「そ、そんなことの為に僕は生贄にされなきゃいけないのかあ〜」

「だ…大丈夫…よ…。し…死には…しないわ…。」

「た…ただ…ちよつと…」

「ちよつとなに？中途半端に終わらないですよ。気になるじゃないかあ〜」

石津はそれ以上答えようとはせずに、呪文を唱えていた。

「ちよつ、ちよつと。質問はまだ…」

あつ、何か力が抜けて行く…。

僕はこんなところで終わりなのか、こんなことなら、舞の靴下の匂いを嗅いでおけば良かった。

そんなことを考えている間に、僕の意識は遠のいていき、やが

て暗転した。

気が付くと僕は、自分の部屋のベットに横たわっていた。日付はすでに翌日になっていて、そして外は、雨が降っていた。

終わり



初めての方には初めまして。浅賀葵です。

今回は、液が当社比135%増しです。液描くのが楽しくて、ついつい描き続けてしまいました。いかがだったでしょうか。

ガンパレは、非常に色々な事が出来るゲームでして、最初にプレイしたときは舞のケツばかり追いかけてました。

テレパスセル（各キャラの居場所特定）&テレポートセル（瞬間移動）と言う2連コンボで、ストーカーが出来るんですよね、、（笑）

そんなわけでして、必然的に今回の本は、ガンパレのヒーローこと芝村舞さんに。どうも、綾香等々、お嬢（姫）様系のキャラに弱いようです。

後、つり目ってのもポイント高いですw

今回のゲストは、三毛猫さん。

急なお願いだったにも関わらず、ありがとうございました。

萌、凄いイイ味出てます☆

この本をお手にとっていただいた方に感謝を込めて☆

少しでも皆様に楽しんでいただけたのであれば幸いです。

また、次回お会いしましょう

浅賀葵



PERCEPTION  
since 2000



# EmerGENCY

発行 ぱーせぷとろん

発行日 2001年12月29日

印刷 二モ印刷工房

無断複製、無断転載は禁止。  
18歳未満の方の購入も禁止です。



**-Emergency-**

perceptron presents  
GunparadeMarch mai shibamura

**FOR ADULT**

